



歯科診療科紹介 / 口腔診断科

## 口腔粘膜疾患の診療について

口腔粘膜は消化器および呼吸器の入り口である口腔を保護する重要な組織です。口腔粘膜に疾患のある患者さまでは、“痛くて食べられない”、“呑み込めない”などの摂食障害から、“食欲がない”、“気力が失せた”など全身状態が悪化する場合があります。

口腔粘膜疾患を診療する上では的確な診断を行い、感染や機械的刺激など症状を増悪させる因子を除去して口腔環境を改善し、病変に対応した治療を早く開始する事が重要であり、患者さんのQOLの向上に直結します。

しかしながら、口腔粘膜疾患には多種類の病変があり、放置しておいても自

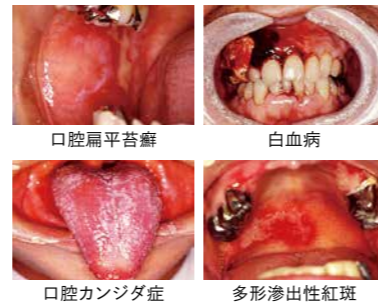
然治癒する疾患から、難治性で口腔粘膜以外の臓器や組織に影響を及ぼす疾患、口腔癌のように生命に危険を及ぼす疾患まで様々です。また、内科疾患や皮膚疾患の初発症状や部分症状として口腔粘膜に病変が出現する場合があります。

口腔粘膜疾患は実際に視診や触診が可能であり、病変の肉眼的所見は診断上極めて重要です(付図参照ください)。一方で口腔粘膜疾患は感染や機械的刺激などによる二次的変化を受けやすく、定型的な病態像を示さないことが多くあります。そのため詳細な検査や経過観察を経て確定診断へ到達する症例が多く、なかには皮膚科や内科との連携が

## Dental Department

重要な症例も数多く経験しております。

口腔診断科は、医科歯科連携による口腔粘膜疾患の診断と治療を行っております。このような患者さまがおられましたら、ぜひ、ご紹介くださいますようお願い申し上げます。



口腔扁平苔癬

白血病

口腔カンジダ症

多形滲出性紅斑



認定看護師紹介 / 皮膚・排泄ケア認定看護師

## 千葉 倫子 (ちば みちこ)

皮膚・排泄ケア認定看護師は、1997年より認定が開始され、2015年5月現在2040名が日本看護協会に登録されています。私たちの活動は、褥瘡などの創傷管理や、ストーマ(人工肛門)、失禁等の排泄管理を通して、患者様や、家族のセルフケアを支援しています。現在では、在宅患者様の褥瘡管理の面においても、皮膚・排泄ケア認定看護師のニーズがあり、病院のみならず、地域での活動が求められています。

私は、東8階病棟(肝胆脾外科、胃腸外科)に勤務しており、4月より週1回WOCセンターの外来を担当していま

す。病棟では、ストーマケアや、皮膚トラブルを持つ患者さんとの関わりや、病棟スタッフへの指導を行っています。ストーマケアは、ボディイメージも変化するため、身体面だけではなく、精神面のケアも重要となってきます。そのため、入院前から、ストーマに対しての不安を軽減できるよう、外来、病棟、地域医療連携センターとの連携を行っています。退院後も、その人らしく生活できるよう、外来で定期的にフォローしています。

認定看護師となり2年目ですが、病棟で手術後の患者様に向き合い、私も一緒に学ばせていただいています。今は

ストーマのセルフケアを実施し、退院後元気に生活されている姿を外来で見るのが何よりの喜びです。これからも、患者様と家族の笑顔のために、他職種とも連携しながら専門的知識を生かし、ケアを提供していきたいと考えています。



## People



お知らせ

## Information

### 総合診療外来は2015年7月より新患予約制となりました。

新患日：月～金(祝祭日・年末年始を除く)  
TEL：総合診療外来 022-717-7509

#### 編集後記

暦の上では立秋ですが、まだまだ暑さが続きますね。年に2回開催しております市民公開講座も今年の秋で第13回となります。今回は、参加して下さった皆さまにAED、胸骨圧迫を実際に体験していただくという内容となっております。皆さまのご参加をお待ちしております。(地域医療連携係 山田こずえ)

#### 編集/発行

東北大学病院 地域医療連携センター  
TEL：022-717-7131 FAX：022-717-7132  
Eメール：ijik002-thk@umin.ac.jp  
ご意見・ご要望は、地域医療連携センターまでお問い合わせください。



イベント情報

## 東北大学病院開設百周年記念 第12回市民公開講座を開催しました

6月7日(日) 仙台国際センター大ホールを会場に、東北大学病院開設百周年記念 第12回市民公開講座「東北大学病院が取り組む脳の病気を開催いたしました。県内外から、たくさんの申し込みがあり、約870名の方にご来場いただき、会場はとても賑わいました。

第一部では、神経内科 長谷川隆文先生、中島一郎先生、青木正志先生による「パーキンソン病ってどんな病気?」「多発性硬化症という病気をご存知ですか?」「難病に挑む」と題し、基調講演を行いました。パーキンソン病の発生率や主な症状、画像診断をはじめとする検査方法や、脳や脊髄の炎症で発症する多発性硬化症についての症状や診断方法、筋萎縮性側索硬化症の臨床研究や新規治療法開発の最前線について、講演しました。

第二部の記念講演は、慶應義塾大学医学部 岡野栄之教授をお招きし「iPS細胞技術を用いた未来の医療」と題し、現代の医療ではとても関心の高いiPS細胞を用いた最新の治療開発について、わかりやすくご講演いただきました。

第三部では、コーディネータとして東北大学大学院医学系研究科 発生発達神経科学分野 大隅典子教授をお迎えし、基調講演の医師ら3名と岡野教授によるパネルディスカッションが行われ、事前に市民の皆さまから寄せられた質問に答えました。

また、イベントホールでは、写真で綴る百年のあゆみや、8月に参加する仙台七夕まつりなどの開設百周年記念事業の紹介、白衣や手術着を着て当院広報誌hesso(へっそ)の表紙写真を体験できる「移動写真館hesso」などの企画で盛り上がりました。

次回、第13回市民公開講座は11月7日(土) 仙台国際センターにて「わたしが守る大切なひと」をテーマに開催予定です。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。



## Event



東北大学病院



新診療科長紹介 / 緩和医療科長  
井上 彰 (いのうえ あきら)

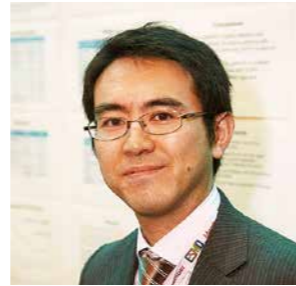
2015年5月15日付で緩和医療科長を拝命しました井上 彰(いのうえ あきら)です。

2000年に国立大学病院として初の緩和ケア病棟が設立されて以来、同病棟では2000名以上のがん患者さんに対して専門のスタッフが手厚いケアを提供してきました。さらに、2006年に発足した緩和ケアチームは、他科でご入院中の患者さんにおいても苦痛ない療養生活を送れるよう、主治医と連携して治療にあたってきました。緩和医療は「がん終末期の看取りのケア」と誤解されがち(実際、始まりはそのとおり)ですが、昨今は「がんと診断された時からの緩和」が世界の常識となっています。抗がん剤などで治療中の方であっても身体・精神・その他の苦痛を速

やかに緩和し、「より良く生きていただく」のが現在の緩和医療の目的です。

都道府県がん診療連携拠点の指定要件として本年7月に開設された「緩和ケアセンター」は、まさにその中心的な役割を担います。すなわち、従来からの緩和ケア病棟と緩和ケアチームに加え、院内のがん患者さんに対して広く苦痛のスクリーニングを実施して、「声なき痛み」に対しても「がん看護外来」等を介して積極的に対応します。そして、地域の医療機関の皆様とも密に連携し、東北地区における質の高い緩和医療の普及を目指します(他院でがん治療中の方であっても緩和ケア外来やセカンドオピニオンの形で積極的に「早期からの緩和」を支援します)。さらに当科が果たすべき役割として、臨

床のみならず医学生や若手医師に対する緩和医療の教育や質の高い臨床研究の実践も挙げられますが、緩和ケア研修会や種々の勉強会の企画、多施設共同研究への参加という形で地道に活動しています。今後も当教室の充実をはかり緩和医療の発展に貢献できるよう努力しますので、ご助力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



People

特殊診療施設紹介  
唇顎口蓋裂センター

唇顎口蓋裂をはじめとする先天性顎顔面疾患は、形成外科・耳鼻科・産科・小児科といった医科と、顎口腔機能治療部・顎口腔再建治療部といった歯科、及び言語聴覚士、発達臨床心理士、医療福祉ソーシャルワーカーといったパラメディカルまで幅広い医療関係者の協力のもとチーム医療で加療を進める必要があります。当センターでは、唇顎口蓋裂をはじめとした先天性顎顔面疾患に対し出生直後から成人に至るまで一貫した治療を行うことを目的として、形

成外科を中心とした医科・歯科合同の多科横断的なチーム医療を形成し、包括的かつ先進的な治療を行っています。当センターでは、医科・形成外科と歯科・顎口腔機能治療部が隣同士の外来に配置され、日常診療において密な連携がとれるようになっています。担当医がお互いの外来を行き来することも珍しくありません。また、形成外科、顎口腔機能治療部、耳鼻科の専門外来が同一日に設定されており、患者さまへ one stop 外来を提供できるように配慮



「形成外科」が当センターの窓口です。予約は地域医療連携センターよりお願いします。

新生児・出生前カウンセリング・新患外来  
毎週木曜日 14:00-16:00(要予約)

唇顎口蓋裂・顎顔面外科専門外来  
毎週火曜日 9:00-16:00(要予約)  
奇数週水曜日 14:00-16:00(要予約)

Facility

しております。

また、胎児エコーにて出生前診断がなされた親御様に対する「出生前カウンセリング」も積極的に行っております。出生後の発達臨床心理士によるカウンセリングや看護師による哺乳育児相談といったサポートも全例に行っております。

宮城県内はもとより東北地方の広い範囲から多くの患者さまを治療させて頂いております。これまで治療してきた多くの患者様が社会で活躍していることが私たちの誇りです。

医科診療科紹介  
乳腺・内分泌外科

乳腺・内分泌外科は、主に乳癌を中心とした乳腺悪性及び良性腫瘍などの乳腺疾患と内分泌(甲状腺、副甲状腺、副腎)疾患を対象とした診療科で、研究・教育および診療に取り組んでいます。

最新の画像診断装置を駆使して  
最適な診療を提供

乳腺疾患については、最新の画像診断(マンモグラフィ・超音波検査・MRI・CT)を駆使して、互いに組み合わせることによって、今も増え続けている乳癌の早期発見\*・診断及び適正な治療に努めています。

\*Sensitivity and specificity of ultrasound and mammography screening for breast cancer, and stage distribution of detected cancers: results of the Japan strategic anti-cancer randomised controlled trial (J-START). The Lancet, 2015

LTFによる整容性の高い乳房形成

乳癌の治療においては『乳房温存療法』を全国に先駆けて導入し、乳房温存療法実施率の高さ、温存乳房内再発率の低さで優れた成績を挙げています。特に、当科で1994年に考案したLTF(lateral tissue flap)\*法により、創が目立たず整容性の高い乳房形成手術を行っており、患者さんの高い満足度を得ております。最



乳房温存手術：創が目立たない側胸部からのアプローチ

2014年 治療実績

乳腺疾患	外来新患	509名
	外来再来	9,680名
乳がん手術		143名
・乳房温存手術		101名
・乳房全摘手術		42名
甲状腺上皮小体疾患	外来新患	334名
甲状腺手術		70名
・甲状腺がん		44名
・良性疾患		18名
副甲状腺手術		8名

2014年 乳腺内分泌外科 治療実績



スタッフ集合写真

近では、RI及び色素法を用いたセンチネルリンパ節生検法や、人工乳房を用いた乳房再建術などにも対応しております。一方で、進行して発見された乳癌の患者さんや再発された患者さんには、最新の臨床試験データの知見を元に、病状に応じた化学療法(抗癌剤)、内分泌療法、分子標的治療、放射線治療の組合せにより、治療効果を高めています。

\*Breast-conserving surgery for primary breast cancer: immediate volume replacement using lateral tissue flap. Breast Cancer, 1997

新しい乳癌治療薬の治験

近年、分子治療薬を中心とした新しい乳癌治療薬がつつぎつつぎ開発されております。当科では、まだ保険診療で認められていない新たな乳癌治療薬の臨床試験や治験を専門の治験コーディネーターらと共に万全の体制で実施しており、乳癌診療の更なる発展に努めております。このように、診断から手術・治療まで、日本乳癌学会乳癌専門医6名を中心として、放射線科、病理部、緩和医療科及び乳癌看護認定看護師などの専門スタッフと連携した総合的チーム医療で診療に当たっております。

最新の神経刺激装置による  
甲状腺手術時の神経温存

甲状腺疾患については、甲状腺癌

をはじめとした甲状腺腫瘍性病変、バセドウ病、副甲状腺機能亢進症などの、甲状腺・副甲状腺疾患の診断、治療(手術)、さらには経過観察までを行っています。甲状腺癌の手術で最も注意すべきことは、発声の質に関わる反回神経や上喉頭神経の温存です。最近では最新の神経刺激装置を用い神経の走行を確認しながら確実に温存されるように配慮して手術を行っています。また、転移・再発の治療として放射性ヨード大量内用療法があり、放射性ヨードのカプセルを内服する治療ですが、専用の病室に入院が必要です。当院は、全国でも数少ない専用病室を有する施設です。実際の治療は放射線治療科が担当しますが、手術療法と合わせて協力しながら治療を行っています。また、昨年より切除不能甲状腺癌に対し、分子標的薬が使用できるようになりました。当科でも必要な症例に積極的に使用を検討しています。甲状腺グループは機能温存やQOLを重視しながら一人ひとりの病状に応じた適切な治療を行うよう心がけています。

当科は、日本外科学会、日本乳癌学会、日本内分泌外科学会、日本癌学会、日本癌治療学会等における学会活動を通して、質の高い診療を目指し、実践しています。一方では、宮城県、仙台市、県医師会、市医師会等との連携を深め、地域医療にも積極的に貢献しています。

Department